

平成 30 年 10 月 11 日

平成 30 年度アーバンデザインスクール前期第 4 回実績報告書

1. 前期第 4 回概要

(1) 開催日時

平成 30 年 9 月 29 日 (土) 10 時 30 分から正午

参加人数 : 22 名

(2) テーマ

“快適に歩ける歩行空間のデザインって!?”

- 「東海道統一案内看板制作プロジェクト」の試みと「近江の懐」取材より -

(3) 話題提供者

石川亮 (成安造形大学芸術学部地域実践領域准教授、附属近江学研究所研究員)

(4) 話題の概要

- 第 4 回は、「快適に歩ける歩行空間 (ストリート、プレイス)」と題して、成安造形大学地域実践領域の准教授であり、附属近江学研究所の研究員でもある石川亮氏に話題提供をいただいた。
- 自己紹介、そしてストリート、プレイス
 - 石川氏は美術家でもあり、自然と対峙しながら自然と共存してきた人々の暮らしを作品にしてこられた。
 - 近江の国は中央に琵琶湖が、そしてそれを囲むように山々が連なる。山々からは湧き水があり、琵琶湖に注ぐ。石川氏はこの湧き水スポットを巡り、湧き水から採取した水をボトルに詰め、近江の地形に合わせて配置。またその水を凍らせて地形どおりにプレートにおき、氷 (固有) が溶け、水が流れ出し、ひとつ (全体) になる作品「全体 - 水」を作られた。
 - 湧き水巡りを通じて、この命の水の周辺には必ずと言って良いほど近江の暮らしの中から息づく生業 (なりわい) があることに気づかれた。これを「近江の懐 (ふところ)」と呼び、近江の懐の取材を続けられている。
 - 近江は都が近く、いつの時代も歴史の舞台をかたちづくってきた場であり、街道が行きかう交通の要衝である。その街道 (ストリート) の潜在能力を活かした地域の活性化とその繋がりがあり、脇には宿場町の持つ包容力と歴史性に裏付けられた新たな場 (プレイス) が展開している。その事例として「東海道統一案内看板制作プロジェクト」の試みと「近江の懐」取材を紹介いただいた。

- 「東海道統一案内看板制作プロジェクト」の試み
 - 配布資料「東海道をデザインする!?!-旧東海道案内看板デザインの試み-」(文化誌「近江学」第9号 -道はつなぐ)より抜粋)を参照。
 - 大津市から大学に旧東海道案内看板のデザイン依頼があった。
 - 草津市は大津市と良好な景観形成を目指す連携協定を結んでいることから、草津市も参加し、デザイン制作プロジェクトを立ち上げた。
 - その取組の思考プロセスは7段階ある(配布資料参照)。
 - 実地調査では現在の看板は、ラーメン屋の看板に隠れている、有名な場所なのに看板がない、道路がそもそも東海道を貫けない、案内板の向きが違う、文字が薄れて読めないなど看板が多い割にはまったく看板として機能していないことがわかった。
 - デザインは「近江八景」や「東海道五十三次」に書かれた情景や古文書などの文字を参考に作成した。
 - 大津市と草津市それぞれひとつずつ製作した。看板は設置者の自費であったが、大津の場合は琵琶湖畔に流れ着いた流木を使い、文字も彫るなど自分ゴトとして捉えた。草津も文字を焼いたり、最終的には色を変えたり、設置した商店の屋号を入れるなど工夫を凝らした。
 - たったふたつかも知れないが、これは大津市と草津市の東海道を起点に、それぞれの場所にあったサインを地域で考え、ひとつひとつ設置しながら、街道全体を統一したサインでつなげていく試みである。期限も設置場所も決めておらず、設置費用も設置者の自己負担である。
 - 現在マニュアルを作成中であるが、デザインなどの基本的なルールだけを決め、あとは地域の人々がその地域にあった設置場所や材質などを議論しながら、少しずつ看板を増やしていく。そのプロセスを通じて地域の潜在能力が発揮され、街道を通じて他の地域に活動が伝搬していき、最後は街道すべてのひとつになることを目指している。
- 「近江の懐」取材
 - このようなストリーートの脇には、絶えず次の時代を予測し、新たな考えやアイデアを生み出し、受け入れ、イノベーションを起こす一方で、伝統や独自性を重んじ日々工夫し知恵を出し合う場(プレイス)がある。そこを「近江の懐」と呼んでいる。その事例として「大津の茶櫃」、「海津の木桶」、「木之本の酒蔵」、「八日市のジーパン」の事例を紹介する。
- 「大津の茶櫃」東海道・大津宿(茶舗・中川誠盛堂)
 - 安政5年創業の老舗。
 - 店内に先々代から使用されている川の文字がデザインされた黒い茶缶がある。

- 店内には今も使われている江戸時代の茶櫃（ちゃびつ）がある。この茶櫃には逸話がある。江戸時代東海道を参勤交代する侍に無礼があり、慌てて茶屋に逃げ込んだ者を当時の女将が茶櫃に入れて匿った。侍が探しにきたが、女将は断固として茶櫃を開けさせなかった。このように街道の人々は自分たちの街で、決して刃傷沙汰を起こさせないという気概があった。
- 「海津の木桶」北国海道・海津宿（魚治）
 - 7代続く鮎ずしの店。
 - 昭和30年代から木桶に代わり、プラスチックの桶で鮎ずしを作るようになったが、昔ながらの木桶とは味が違うと祖母に聞き、再度木桶で鮎ずしを作ることを試すことにした。
 - 木桶職人をさがしたところ、堺市にしか木桶職人はいないという。職人は意気を感じて優先して木桶を作ってくれた。
 - 鮎ずしの木桶は酒屋や醤油屋の「お古」がいい。
 - 堺市の木桶職人のところには何気なく酒屋や醤油屋の古い桶が置いてあり、それを材料に木桶を作ってもらった。
 - このように鮎ずし屋にとってはお古ではなく、新品なのである。
 - 最近の台風で料亭は被害を受け、再開は難しいとのこと。これも自然と対峙する人々の姿かもしれない。
- 「木之本の酒蔵」北国街道・木之本宿（富田酒造）
 - 14代続く北近江の地酒「七本槍」を作る富田酒造。
 - 酒蔵建て替えの際に周辺の景観に合わせた木造で新築。
 - 酒蔵は斜面に立地しており、タンクは水平に保つため、微調整されている。
 - 建て替えの際に別の土地に移る、鉄筋やコンクリートにするなどいろいろな案があったが、街の景観を維持するため、木造で新築した。
 - しかし、タンクは作業がしやすいよう中2階を作り、作業を楽にするなど工夫を凝らした。
 - 御本人からはまちづくりという言葉はでてこないが、それはこのまちに住み、酒蔵を営んできた当事者であるからこそである。
- 「八日市のジーパン」御代参街道・八日市宿（CONNERS SEWING FACTORY）
 - 昔ながらの製造方法でジーパン（デニム）を作る店。
 - 米国カリフォルニアがゴールドラッシュに沸いた1848年にジーパンが作られた。
 - 1940年代の製造方法に敬意を払い、その当時の作り方を再現している。
 - ネット通販はせず、ここ八日市に来ないと手に入らない手作りのジーパンである。
 - そのため、この店のジーパンを買い求め、海外から訪れるマニアもいる。

- 父親もまちづくりにかかわり、この地域で初めてアイビーの店を開き、多くの若者が訪れたという。
- そのこともあって、この八日市の地でジーパンを作っている。
- ふたつの事例から見てくること
 - 自分の問題として捉える。(当事者意識、実践力、自分ゴト)
 - ✧ 看板の事例では、当初反対していた人が話している間に自分が当事者であることに気づき、積極的になった。
 - 様々な「こと、もの、ひと」への関心と気づき。(潜在能力、探究心、多様性)
 - ✧ 看板を実地調査することにより、色々な看板や目印があることに気づく。
 - 活動をやめないこと、「続き」をつくること。(継続性、持続性)
 - ✧ 木之本の酒蔵や八日市のジーパンのように時や場所にあわせ、変化しつつも活動を続けていくこと。
 - 面倒なところに問題がある。(効率化が全てではない)
 - ✧ 看板は3年で二つであるが、ひとつひとつ話し合いを重ねながら、設置している。
 - ✧ 木之本の酒蔵もあえて効率化せず、創意工夫している。
 - ✧ 八日市のジーパン屋、海津の鮎ずしもしかりである。
 - 小さな活動の集まり。(大きな流れや話にのっかるのではない)
 - ✧ ストリートやプレイスとは、期限を決め、予算を確保して、一気に大きく新しいものを作っていくのではなく、小さな活動を試行錯誤しながら、みんなが進めていくプロセスで、自然と形成されていくものである。

(5) ディスカッション

- 「東海道統一案内看板制作プロジェクト」を聞いていると、私が現役時代に推進していたエコミュージアム構想と同じである。エコミュージアムというと建物を建てるイメージであるが、小さな活動を続けていくことであり、活動拠点のことであり、まさしくストリート、プレイスである。また地域の潜在能力とは「ないものねだり」ではなく、「あるものさがし」である。遺産は過去のものではなく、子孫への贈り物であると考えており、まちづくりとはひとつづくりであることを実感した。
 - 看板は当初は文句ばかり言っていた人が、言っているうちに自分自身の問題、自分ゴトであることに気づいた。まさしくひとつづくりでもある。看板製作プロジェクトもプロセスを大切にしている。
- 看板は統一性が大切である。滋賀を訪れた人が、ここのまちのイメージが湧くようなデザインが必要である。私の会社は今の場所に事務所を移転した時、ファサードを宿場町の街並らしくした。街道沿いにこれから出来るマンションには、マークひとつでも街道らしいものを採用してもらっただけで随分と印象が違おうと思う。訪れ

て良かったと感じてもらえる景観づくりが必要である。

- 大津の看板は昔からの建物に設置したのではなく、製造業者の事務所新築の際に壁と看板を新しく作ってもらった事例である。これから建つマンションにもこのようなことをしてもらえれば、おっしゃるように随分と景観は変わる。
- 行政は効率化が求められており、市民オンブズマンも同じように効率化を求めている。私も当初は看板がたったふたつと思ったが、看板ひとつに非常に手間をかけている。まちづくりはひとつづくりであることが理解できた。小さな積み重ねと心ある人が自分ゴトとして取り組むことが大切だと感じた。
 - それぞれの場所で再編集して、新たな場をつくりながら、進めていく。そのため、三步進んで二歩下がるなど非効率にみえるようなことも起こるが、これも大切なプロセスである。
- 東海道だけではなく、中山道もあり、中山道も守口宿など含めれば 67 次ではなく、69 次となる。大津市、草津市だけではなく、街道沿いに広げて行ってほしい。
 - 石部宿、守山宿などからも問い合わせがあり、将来的には京都から日本橋まで繋げていきたいと考えている。

(6) まとめ

石川氏は近江の山々の水源を巡り、湧き水を採取されてきました。その命の水は淀みを作り、淀みで生き物たちの豊かな生態系を育みながら、生き物たちは増水のたびに下流に移動しつつ、各地の湧き水は琵琶湖に注ぎこみ、全体となっていきます。大切なことは常に水が流れ、そして、多様な生き物を育む淀みがあること。

街道（ストリート）も同じです。様々な地域からの人々が街道（ストリート）を行きかい、街道（ストリート）沿いには「近江の懐」とでも呼ぶべき、伝統や独自性を重んじつつ、新たな考えやアイデアを生み出し、受け入れ、イノベーションを起こす新たな場（プレイス）があること。そして、その場（プレイス）から生まれた活動が街道（ストリート）を通じて、次の時代、次の場所に伝搬していくことにより、街道（ストリート）として共通の街道文化や景観が形成されてきました。

看板制作プロジェクトは、このようなプロセスを現在に取り戻すための試みといえます。大津では新たに建設した建物の塀を看板に合うように街道（ストリート）にふさわしいデザインにしました。草津でも看板に屋号を書き、街道（ストリート）沿いの古い商家の軒先にふさわしいデザインにしました。

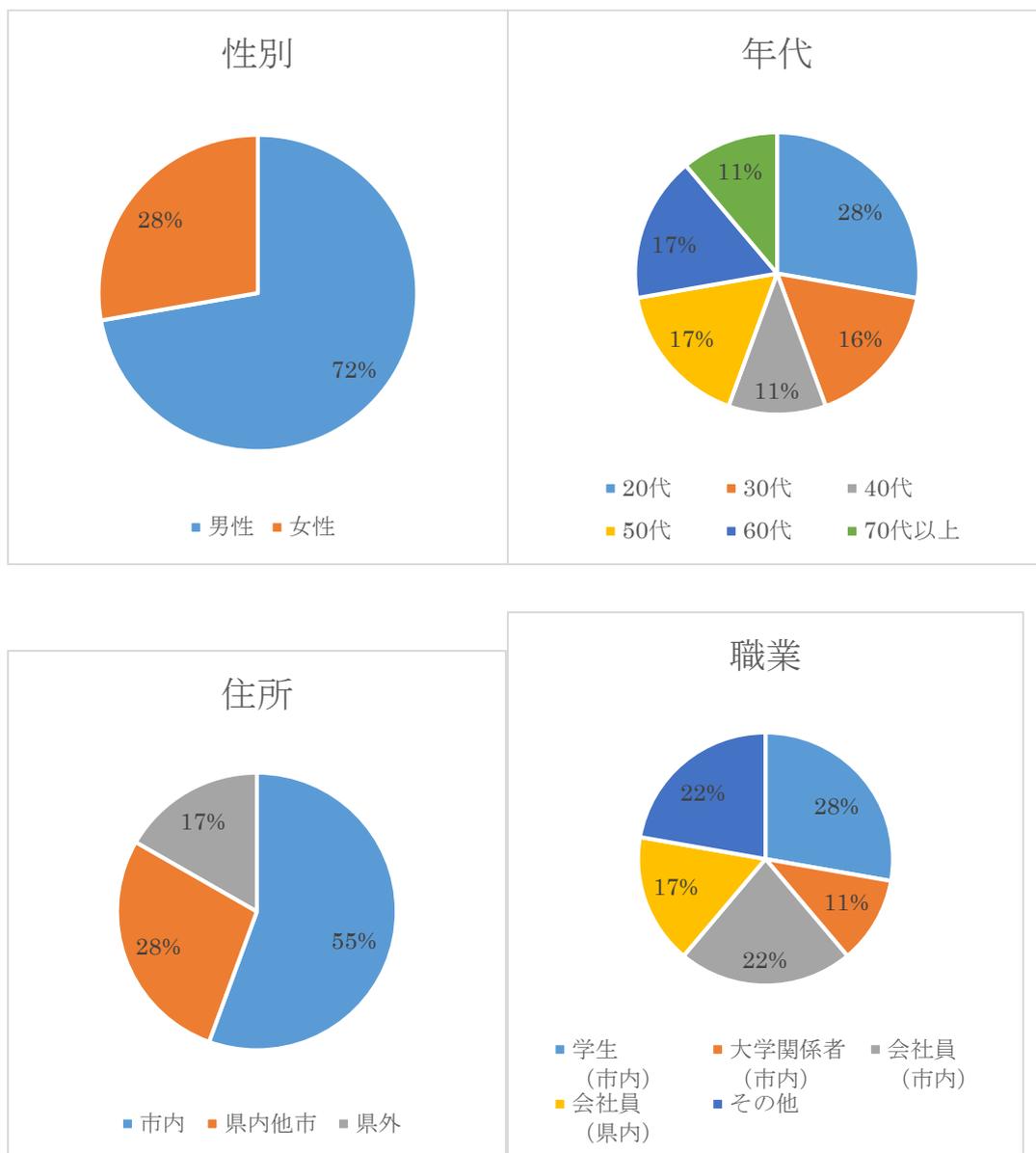
この看板製作プロジェクトに関係した人々の中から、新たな活動が生まれ、その活動の拠点として新たな場（プレイス）、すなわち懐が生み出されてくると期待しています。

そして、UDCBK が新たな懐を生み出す湧き水の水源となるよう、必要なサービスを充実させていきたいと考えています。

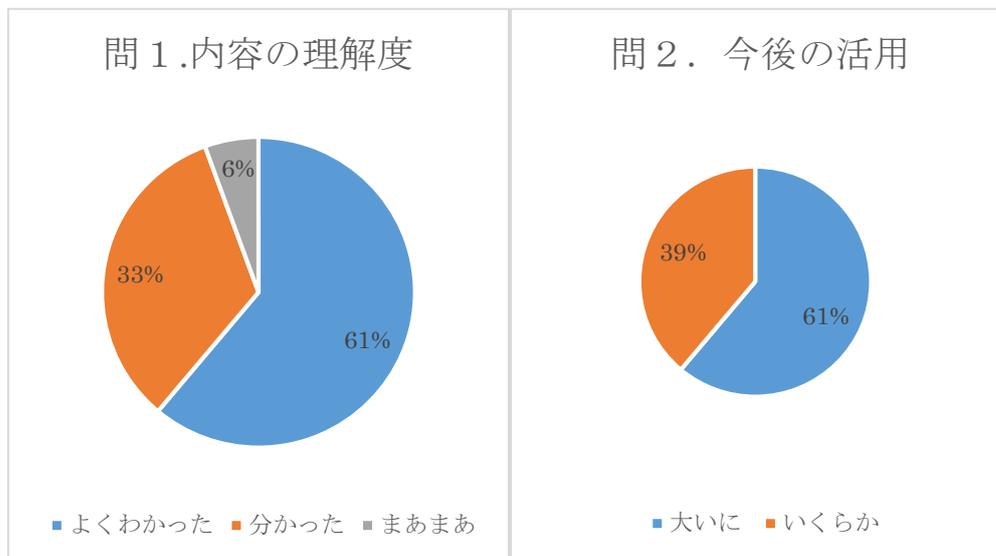
(7) アンケートまとめ

① 参加者属性

参加者 22 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 18 名、回答率は 82 %でした。



② 内容について



③ 内容に関する自由記述

- 滋賀の湧水マップ。
- 東海道統一案内看板制作プロジェクトの実現までのプロセスがおもしろいと思った。どんなものにしていくという議論の末にどんどんこだわりだし、そこにも地産のものを使うなどということが住人にも親しみを持ってもらえる工夫だと思った。
- 看板を通して行うまちづくり、話がどんどん膨らみ進んでいくことに面白さを感じた。私も地元が田舎だが、大好きな気持ちは強く持っているのもそれは大切にしていきたい。
- 東海道の案内看板の話が印象に残りました。案内看板が滋賀県からどんどんつながっていくことで、古くからの歴史が守られることに繋がればいいなと感じました。
- 本当に良かったです。良い例だったと思います。
- 日本人は自然と共存してきた。自然災害も含めて、自然のなかに人がいるという感覚が文化歴史の中に息づいていると思う。その感覚をベースに、ITやAIを付加しながらどうやってイノベーションを起こしていくかがSDGsの持続性につながっていくと思う。
- しがの魅力発信にどうつなげられるか楽しみです♪
- 続けていくことが大事というお話をとても心強く思いました。統一看板にかけられている情熱、熱量を知れてよかったです。もっと多くの方に知っていただき、広げていきたいです。
- 土地の生活・文化、建築などを生かして残そうとしている人がいることを知れてよかったです。

以上